

あす おも ころ  
ぶつきょうつうしん  
仏教通信 「明日ありと 思う心」 3月

季節は「早春」となり、桜の開花予想(東京都心3/17 NHK首都圏ナビより)のニュースが流れていました。桜は、日本の文化や精神性に根付いた花であり、多くの文学や芸術に影響を与えてきました。また、桜はその散り様から、仏教の「諸行無常」のはかなさをあらわす象徴的な花としてあらわされます。仏教は、この世の全てのものは「無常」としてあり、その「無常」とは、全てのものは常に変化し、永遠不滅のものはないということです。人間だけでなく、この世界に存在するもの全て、生まれては老い、そして滅するという思想なのです。

浄土真宗の開祖 親鸞聖人は平安時代の末に生まれ、幼名は松若麿(まつわかまろ)といい、藤原家の流れをくむとはいえ貧しい貴族でした。幼い時の聖人(松若麿)ですが、4歳の時に父が出奔(逃げて行方をくらますこと)し、8歳の時には母を亡くしてしまいます。本来ならば幼少の時に、愛情をもって育ててくれるはずの両親がいなくなってしまうのです。そのような境遇になってしまった松若麿は9歳の時に、叔父に連れられて天台宗の青蓮院にやってきて、得度式(仏教の僧侶になるための儀式)を願い出たと伝えられています。

幼い松若麿が意を決して得度を願い出た時、青蓮院のお坊さんたちは「今から式を始めたとしても、終わるのは夜遅くになってしまうから、明日にしよう」と、松若麿にこたえました。そんなお坊さんたちに向けて、松若麿は「明日ありと 思う心の あだ桜 夜半に嵐の吹かぬものかは (明日もまだ咲いていると思っている桜も、夜中に嵐が来て散ってしまうかもしれない)」という歌を詠んだので、お坊さんたちも松若麿の気持ちをくんで、その日のうちに得度を許可したと伝えられています。幼いながらも、この世界はいかに脆くて、移ろいやすいかを経験してきた松若麿は、諸行無常のこの世界であるからこそ、一日一日を決して無駄にせず、大切に生きようという思いを詩歌にしたためのです。

9歳の児童(小学3年生)が、今この時を精一杯生きようとしているのですから、現代に生きる 私たちも面倒くさがって先送りにしていた事柄があれば、すぐに取り組む真摯な生き方に 改めていかないとはいけません。もうすぐ年度が改まる 4月になりますので、心機一転、良いスタートを切りましょう！



合掌

小中の卒業式は3月21日(木)、終業式は3月22日(金)におこないます。